

訳10 それを見てある人が言うことに
は、「『かきつばた』という五
文字を各句の頭に置いて旅の思
いを詠め。」と言ったので（男
が）詠んだ（歌）。

訳11 からころも きつつなれにし
つましあれば はるばるきぬる
たびをしぞ思ふ

問一 三句目が「ば」ではなく、
「は」から始まっている。こ
れは「ある人」の指示に違反
しているのではないか。

ア 当時は「ゝ」は発明されておらず、
「ば」という文字はなかった。あ
る人の指示も当時の書き方で書け
ば「『かきつばた』という五文字
を各句の頭に置いて旅の思いを詠
め。」になるので、指示に違反し
てはいない。

イ 当時はすでに「ゝ」はあり、
「ば」という文字があつたから、
指示に違反したことになる。

訳「からころも きつつなれにし
つましあれば はるばるきぬる
たびをしぞ思ふ

問二 「着つつ」という言葉の前に

置かれている言葉（「唐衣」）を何と呼ぶか。

（注）「着る」という言葉の前に

「唐衣」という語を置くことが伝統的に行われていた。

ア枕詞

- ・ ある言葉の前に置くことが伝統的に決まっていた言葉（例「奈良」の前に置く枕詞は「あおによし」）。

- ・ 原則五音。

イ序詞

- ・ あとに来る言葉の印象を強めるために置かれるフレーズ。
- ・ どういうフレーズにするかは歌人の自由。
- ・ 原則七音以上。

訳Ⅱからころもきつつつなれにし
つましあればはるばるきぬる
たびをしぞ思ふ

問三 この歌のように、和歌の五・
七・五・七・七の各句のはじ
めに決まった文字を置いて歌
を詠むことを何と言うか。

ア掛詞 イ枕詞 ウ折句 エ縁語

訳Ⅱ

からころも

唐衣（Ⅱ着物）を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになった」慣れ親しんだ」

「つまし「あれ」ば

「すそ妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張って」はるばる」

「着」来」た

たびをしぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問四 この歌のように、ある言葉

（唐衣）と関係する語（よれ

よれになる・すそ・張る・着る）をちりばめる技巧を何と

言うか。

ア掛詞

イ枕詞

ウ折句

エ縁語

訳Ⅱ

からころも

唐衣（Ⅱ着物）を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになった」慣れ親しんだ」

「つまし「あれ」ば

「すそ妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張って」はるばる」

「着」来」た

たびをしぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問五 この歌のように、一つの言葉

に二つの意味を持たせる（す

そ・はる・着る）を和歌の中

にちりばめる技巧を何と言う

か。

ア掛詞 イ枕詞 ウ折句 エ縁語

訳Ⅱ

からころも

唐衣（Ⅱ着物）を

きつつ「なれ」にし

着ていて

「よれよれになった」慣れ親しんだ」

「つま」し「あれ」ば

「すそ」妻」が「ある」いる」ので

「はるばる」「き」ぬる

「ピンと張って」はるばる」

「着」来」た

たびをしぞ思ふ

この旅をしみじみ思う

問六 この歌の正しい説明は？

ア妻への思いをストレートに歌っている。

イまだ旅の序盤で、表だって妻への思いを歌うわけにもいかず、その思いを着物の調子をユーモラスに歌う中に潜めている。

ウまだ旅の序盤で、表だって妻への思いを歌うわけにもいかず、その思いを着物の調子を格調高く歌う中に潜めている。

